素描

ふるさと秋田

多治見市民病院長　今井裕一

私は、70年前に秋田県南部海岸沿いの仁賀保町（現にかほ市）で生まれた。家の南の窓からは鳥海山が望まれ、北側の海の向こうには、男鹿半島の寒風山が見えた。父は会社員、母は中学校の養護教員で、姉と妹の5人家族だった。父は、私が中学3年の時に北海道苫小牧に転勤になり、単身赴任していた。高校卒業後1年間浪人した後に、1971年に新設の秋田大学医学部に入学した。

在学6年の間、大学病院その他の施設も建設中で、卒業の数カ月前にようやく完成した状況だった。先輩は1学年しかなく、本当に医者になれるのか不安なことも多々あった。結局、自分の道は自分で切り拓くしかないという結論に達していた。このような中で、同級生から全国の大学教授が6人出ている。また、現在、日本医師会副会長の今村聡君や第100回の芥川賞を受賞した南木佳士君もいる。南木君の小説「医学生」に私たちの大学生活が凝集されている。90人の同級生に起こったことが4人の主人公に集約されているが、同級生の評価は半々だ。秋田に思いれの強い人には酷評されているが、冷静にみればかなり真実を突いている。

その小説の最後の方に、益田さんという秋田出身の老人と主人公の一人との会話がある。「益田さんは、やっぱり秋田に帰りたいですか」。和丸は益田老人の腕に血圧計を巻きながら聞いてみた。「そりゃあ先生、こういうことだと思うですよ。故郷っていうものには、帰りたくなる故郷と捨てちまう故郷があって――」。

私の故郷は、一体どっちなのだろうか？　自問している。

素描

職業の選択

多治見市民病院長　今井裕一

中学2年の頃に、父に将来の希望を聞かれた。「新聞記者になりたい」と答えた時、父の顔が一瞬こわばった。「そうか、それなら大学をでて、新聞社に入ることになるな」。田舎町を出て行くことを予想したのだろう。

中学3年の8月12日、友人9人と海に泳ぎに行った。私の横を一緒に泳いでいた友達の1人が消えた。1時間後に変わり果てた姿で引き上げられた。あの日以来、何故私でなくて彼だったのか、ずーっと考えていた。

高校3年間は、うつ状態で理数系に力をいれた。将来は「命の現場には関わらない」研究職を目指した。同級生には、「人工衛星を打ち上げる仕事に就きたい」と言っていた。国立1期校の工学部に願書を出した。

書類を提出した12月の末に英語の先生に職員室に呼ばれた。「3年間、お前を見ていて、何か逃げているように感じるのだが」「お前より成績のよい学生は何人かいるが、彼らが医者に向いているとは思えない。今年の受験はもう変更できないが、もし、来年受験することになったら医学部にトライしてみたらどうか。合っているように思う」。幸か不幸か、その年は惨敗し、翌年3月末、秋田大学から「オバコワラウ」という電報が届いた。

医学生の頃は、最初に外科医を考えたが、臨床実習で不向きがわかり内科に転向。消化器・循環器内科も好きになれず、その他の内科（第3内科）でいつも昼飯を一緒に食べていた助教授の下で腎臓病を専門にすることになった。嫌なものから逃げ回りながら、生きてきたようにも思える。たった一度の助言と幸運で人生が変わった。

素描

初期研修医のころ　虎の門病院

多治見市民病院長　今井裕一

大学卒業後、直ちに虎の門病院の研修医になった。2年間の研修中に15人の患者さんが亡くなり、11人で病理解剖検査（剖検）を行わせていただいた。

17歳の女子高生。3年前に脳腫瘍により水頭症となり、脳室腹腔シャント作成。その後、腹膜転移によって著明な腹水と全身転移で亡くなった。

私は、ご家族を前にして涙が溢れて、「ご臨終です」が言えなかった。そばで、上司の紫芝良昌部長も無言だった。ナースセンターに戻ってから、「今井サン、剖検の話はなしにして帰っていただきましょうよ」と先生は言った。

30分くらいたった頃、お母さんがやってきて、「娘の願いを叶えてください。娘は、亡くなる数日前に、今井先生が深夜に痛み止めの注射をして帰った後に、『私に万一のことがあったら、解剖して何が原因か突き止めてください』と言っていました。よろしくお願いします」

私と紫芝先生は、言葉を失った。「先生たち、ありがとう。もっともっと勉強して、難しい病気の患者さんを救ってください」という彼女のメッセージが聞こえてきた。私も紫芝先生も、17歳の女の子に完全に打ちのめされた。その後、大学に戻った理由は、そこにある。

40年後、ある学会で依頼された講演が終わった後のフロアに、紫芝先生がわざわざ来てくれた。「今井サン、元気にがんばっていて嬉しいよ。もう40年ぶりかな。先生すこしも変わらないね」。涙が出るほど、嬉しかった。私の医師のスタートが、虎の門病院で本当に幸運であったとしみじみ感じている。

素描

治る患者　秋田大学病院

多治見市民病院長　今井裕一

１９９０年ごろの話になる。秋田市から１２０キロ離れた町の64歳の男性が、夜間に唸り声をあげて息が止まった。隣で寝ていた奥さんが飛び起きて、心臓マッサージをした。看護師さんだった。心臓の鼓動が戻ったところで救急車を手配し近くの病院に搬送された。救急対応がよかったので救命できた。

その後、腎臓から蛋白が大量に喪失するネフローゼ症候群があることがわかり、大学病院に転院してきた。腎生検などの精密検査の結果、ネフローゼ症候群は、血液の腫瘍である多発性骨髄腫によって生じていることが判明し、治療を開始した。薬剤によく反応し、症状もとれ、退院した。蛋白尿が持続し、外来で２年間治療をつづけ、３年後から尿蛋白もなくなった。

患者さんにとっては、これでめでたしで終わるはずだが、医師、特に腎臓専門医にとっては、本当に腎臓が回復しているのか関心のあるところだ。

患者さんに、腎生検で確認することをお願いした。「私は、一度死んでいます。家内や先生方に救ってもらった命です。あれから７年経ちますが、本当に感謝しています。一度死んだと思えば、この身体で医学のためになるなら、腎生検は軽いものです」。奥さまにも快諾していただいた。

腎生検の結果は、予想通りに、治療に反応して、腎臓の病変は完全に消失していた。あきらめずに治療をすることで治癒することを英語論文にまとめ発表した。いまでも世界中で引用されている。

このように患者さんの協力があって初めて医療が進歩するのだ。

素描

私の師匠　リーダーの姿

多治見市民病院長　今井裕一

私には3人の師匠がいる。1人は、秋田大学第3内科の元教授三浦亮先生で、血液学が専門だ。少しぼーっとしていて、臨床も研究もあまり冴えなかったが、人柄がよかった。研究テーマを強制することはなく各自の自主性に任せていた。上司がぼーっとしていると心配で部下が自発的に育ち、この医局から全国に5人の教授が生まれた。

もう1人は、当時助教授であった中本安先生で腎臓の専門家だ。臨床力もあり論文作成力も高かった。論文作成も学会発表も厳しく赤ペンで添削した。「自動詞と他動詞がよく分かっていない」「一文の中に、同じ単語を使用してはいけない」「添削をするときには、文章を直しているのであって、人格をなおしているわけではない。落ち込むな」とたくさんのことを教わった。話題が豊富で一緒に飲むと楽しかった。12年間一緒に過ごしたが、中本先生55歳、私が41歳の時に、「後は任せた」の一言を残して東京の病院の院長として赴任した。

3人目は、元東京大学教授で元日本腎臓学会理事長の黒川清先生だ。中本先生が黒川先生に私の指導を託してくれた。東京と秋田の距離はあったが、いろいろな仕事を命じられ腎臓学会の教育担当を任された。先生の指示に従い、若手の育成に力を注ぎ、全国の教授、准教授、講師クラスのネットワークを形成することができた。黒川先生は、出身大学や学閥で他人を評価することは全くなかった。

3人の師匠は、それぞれ手段・手法は異なるが、みな後進の育成・教育に熱心であった。それぞれに人がついていく理由があった。

素描

難病のアミロイドーシスと闘う　愛知医大

多治見市民病院長　今井裕一

60歳の男性。舌が大きくなり、滑舌が悪くなり、奥さんがグーグルで検索する（ググる）と、「末端肥大症」がヒットした。そこで、ある病院の内分泌内科で検査した結果、末端大症ではないことが判明し、担当医からは「原因は解らないが、心臓も大きい」と言われた。奥さんは、再度「巨舌」と「心肥大」でググったら、「全身性アミロイドーシス」がヒットし、心筋生検で証明すると書いてあった。翌日、担当医にその論文を示し、心筋生検をお願いした。

1週間後、結果は「ビンゴ」。担当医から「これは難病で、予後は数カ月です。現状では治療法はありませんので、自宅で安静にしていてください」と説明を受けた。奥さんは、憤慨しながら「全身性アミロイドーシス」でググると、厚生労働省の難病センターがヒットし、愛知医科大学に専門医がいることがわかり、外来を予約した。

「これまでの薬の有効率は、20％程度でした。現在は、新しい薬がでて約60％にまで改善しています。一緒に病気と闘いませんか」。治療後、1年くらい経過した頃、近くの医院で気管支炎として治療中に、朝方亡くなっていた。

数日後、奥さんから電話をいただき、「前の病院では諦めろと言われましたが、座して死を待つことは、本人はもちろん、家族も到底受け入れられませんでした。先生におすがりして治療していただいて、本人も希望を持って前向きに死ぬことができました。本当に感謝しています」

人間の死亡率は100％であるが、前向きな死に方が大切なのだとあらためて教わった。

素描

プロの職業人とは

多治見市民病院長　今井裕一

20世紀末から、医療を単なるビジネスと割り切る医師が増加してきた。これは、世界的な傾向で、「自分の得た技術・技能で飯を食って何が悪い」というドクターXタイプである。米国内科学会は、そのような風潮に対して「プロフェッショナリズム」教育を前面に打ち出した。日本の医学教育でも優先的事項になっている。

医療・医学は、本を読んで独学で良医になることはできない。良い師匠や先輩に教わることも多く、さらに患者さんの協力がなければ、実践して身につくこともない。すなわち医師は、自分一人で得た知識や技能は何一つないという事実を知ることが第一歩になる。

米国のスターン博士らは、プロフェッショナリズムを臨床能力（医学的知識）・コミュニケーション技術・倫理的および法的解釈という土台の上に立てられた「卓越性」「人間性」「説明責任」「利他主義」の四本柱と定義している。すなわち「その分野において他者より卓越し」「自らの利益を省みず」「他者に温かく接し」「適切な説明・指導ができること」を指している。

単に自己完結型の医師ではなく、患者・家族、学生・研修医、他の医師あるいは医療従事者、一般の人を指導できる医師のことである。

このプロフェッショナリズムの概念は、医療以外の職種でも当てはまる。例えば、陶芸家がいたとする。自分で生計を立てることができれば、通常プロとみなされているが、他者を指導できてはじめて、本当のプロと呼べるということを意味している。

あなたは、プロの職業人ですか？

素描

ペットから学んだこと

多治見市民病院長　今井裕一

わが家で犬を飼い始めたのは、子供たちが高校生・中学生の頃だった。自分たちが世話をするということで、生まれて3カ月の雌のラブラドールレトリバーを買ってきて「色即是空」の「空」からクーちゃんと名付けた。しかし4カ月目に、突如下痢が始まり血便まで出たので、ある獣医に駆け込んだら「これは、犬パルボです。おそらく助からないし、他の犬にうつるので当院では診ません」。頭に血が上ったが、こんな獣医の所で死なせるわけにはいかないと思って、別の動物病院に駆け込んだ。休日であったが、対応してくれて「大変な時に助けるために獣医がいるのです。いつでも診ますよ」と言ってくれた。高額の注射を何回かと脱水防止に大量の注射を毎日してくれた。おかげでなんとか一命を取り留めた。

その後、甘やかされたクーちゃんは、気がついたら権勢症候群になっていた。散歩は、自分の行きたい所に引っ張り回し、気にくわないと吠えたり噛みついたり、始末に負えないバカ犬になっていた。そこで、2歳の夏から犬の学校に通わせた。わがまま犬が、先生の前ではお利口さんに大変身するのである。結局、飼い主の態度に問題があったのだ。犬になめられないように飼い主が意識改革・行動変容する必要があった。褒め方、教え方、従わせ方、叱り方に大切なルールがあることが分かった。クーちゃんの態度が見違えるほど立派になった。

「子供たちの育て方もまずかったかもしれないな。犬を先に飼って練習してから子供を育てればよかったかもしれない」ということで家内と納得した。

素描

逆境と希望　多治見市民病院

多治見市民病院長　今井裕一

私は、過去に3回、仕事をクビになったことがある。最初は、秋田大学から田舎の病院に出張していた10年目の時である。研修医と部長が些細なことでけんかになり、仲裁に入った際に、激高した部長が、「まとめてクビだ」ということになった。完全に部長が間違っていた。

2回目は、米国留学時代、アラブ系のボスの研究費が国から却下され、ボスも失業の瀬戸際で、私と台湾からの研究生の給料が払えず、安いほうの台湾の研究生を残すために私がクビになった。

3回目は、50歳の時である。秋田大学第3内科の教授選挙で落選し、新教授が着任した。「1年の猶予をあげるが、その後は、退職してほしい」。世の中、こんなものだろう。

半年ぐらいたった頃に、愛知医科大学の教授の募集があり、たまたま応募した。2002年の10月中旬、教授選考会の面接があった。早めに到着したので病院内を散策していたら、ホールに大きな「奥入瀬」の絵が飾ってあった。富士山の絵でもよかったのに、ちょっとした因縁を感じ、質疑応答の際に話した。これが結構うけた。

5年前、愛知医大を退職後、多治見市民病院の病院長に就任した。指定管理後7年間の累積赤字が24億円あった。山田實紘理事長から「思う存分改革してください」と任された。意識改革から業務内容の見直しなど職員全員で行ってきた。今、軌道に乗り始めているが、持続可能な病院になるまでは、あと数年かかりそうである。逆境に至る原因・理由を分析して、科学的に対策を立てれば、フォローの風が吹いてくる。